

# 一九三七年の選択

——性格と運命「周仏海日記解説」——

張 生

(訳 三好祥子)



歴史人物を探索し、その特定の行動の背後にある心理のプロセスを講ずることは、研究者にとって格別の魅力を伴うものである。しかしこのような機会はさして多くはない。なぜなら歴史上の人物、特に政客は総じて真の動機を隠す傾向にあり、神秘性と意外性を確保することで、白日の下にさらすことのできない真の目的を粉飾するからである。いくたりかの人、たとえば蔣中正や馮玉祥などは日記を残していて、これらは本来研究のモチベーションとなる良い材料なのであるが、彼らは自分の日記が必ず後人の興味をそそるものとなるということとつくに認識していて、筆をとる時点で再三推敲し、書いた後もさらに何度も書き直している。正しき道理、厳格な言葉使いの部分が多く、その結果、かえってその価値を損なわしめているので

ある。

それらに比べると周仏海の日記は別格である。彼の性格によるものであろう、日記には感情を述べた部分が比較的豊富で、研究者にとっては、彼の政治的生涯の評価の如何にかかわらず、生き生きとした周仏海が日記中にはつきりと現れたものとなっている。戦後周仏海は身を転じて重慶国民政府軍事委員会調査統計局上海行動総隊隊長となり、政治上の問題はなくなったのであるが、突然おびき出され逮捕されるに到っている。日記には反逆者として財産を没収されたとあり、つまり彼には後人を惑わせるため日記に手を入れる機会はなかったわけで、その内容は基本的に「本来の状態」を保っている。

周仏海の日記はその志向を体现している。一九四三年一

月一日、彼が滞在していた南京西流湾八号の部屋が突然の火災に見舞われた。そのとき彼は昼寝の最中であつたのだが、目覚めるなり即座に日記を引つ掴み外に走り出した。妻の楊淑慧は金銀を一刻も早く運び出すことばかりに気を取られていた。後に、周はよく妻に笑つて言つたものである。「それぞれ人が何を好むかは、いざという時にこそはつきりするものだね」。日記は周氏の意向をくむものであるが、ここに二つの要因をあげることによりさらに重要な歴史的価値が加わるであろう。まず一つ目。抗日戦争初期、中国の民族主義は盛んに興つていた。いかなる教育を受けた人であれ、日本の陣営に投降したのであれば当然そこで一種複雑な心理のあがきの過程を経験するはずで、周仏海のごとき聡明な人物の場合なおさらであろうというものである。二つ目に、周仏海は汪精衛政権の中心にあり、にもかかわらず蔣中正の腹心から軋身した人物である。前途洋々たる主流派の中堅政客として、彼は重慶に残つた大多数の主流派に追隨することなく、庇護者蔣中正の長年にわたる好敵手汪精衛の身に、その前途と命運を託したのである。周仏海は何故このような選択をなしたのか。本当の答えは、体裁の良い文章や演説などからは見出し得まい。

以下は、蔡德金氏が世を去る前に編集した『周佛海日記全編』一九三七年部分を基礎とし、彼の政治選択とその運命にミクロ的解釈を施すものである。

## 一 包惠僧登場

包惠僧は周仏海日記に最初に登場する人名である。湖北黄冈県の人で一九〇四年生まれ、中国共産党第一次全国代表大会に参加した後、一九二七年には共産党を離脱し、国民政府では陸海空軍総司令部参議、軍事委員会秘書兼中央軍校政治教官等を歴任した。一九四九年以降は大陸に残り、全国政協文史資料委員会等で工作に従事した。

一九五三年、包惠僧は毛沢東の命を受け「共産党第一次全国代表大会前後的回憶」を執筆したが、その中の結論といえは、毛沢東は「突出した天才」であり、包惠僧自身は「ただの凡人」というものであった。

その時期、状況はまださほど緊迫してはおらず、包惠僧は意図せずしてあまり知られていない多くの歴史情報を明らかにしている。たとえば毛沢東についてであるが、毛は二〇年代のころ便秘がひどく、普通は一週間に一度やっとう通があるという有様で、みな彼の体を心配していたという話がある。また周仏海についても「中共一全大会は三人の中央委員すなわち陳独秀・張國燾・李達を選出し、二人の候補委員すなわち李大釗・周仏海を選出し、並びに……陳独秀が上海に戻る前、周仏海に代理書記をさせた」と述べている。周は中国共産党第一期中央委員会代理書記とな

り、李大釗と同列にあつた！包はこの事実を埋もれて重要な歴史だと語っている。死後漢奸との評価が定まり、同輩にはただひたすらに避けられてきた周仏海にとつて、生前の交わりの甲斐があつたというものである。

これより一六年前の一九三七年一月一日、周仏海は日記を書き始めている。この日、周仏海は自分には二つの欠点があると総括している。一つは人付き合いが苦手であること。もう一つはあれこれ考えるのを良しとしないことである。「二つ目の欠点のために、友人知人には日々疎遠ならしめ、新たに來たる者には接近の術がない。また友人をして日ごと寂寥の感をもたらず。二つ目の欠点のために、理非曲直があきらかでなく、物事がはつきりしない。また眼光炯々とした見解に欠ける」。周仏海はこの二点の「徹底的な修練」を心に決め、当日江蘇省政府の年始挨拶に参加したあと鎮江から南京に戻つて包惠僧の家に行つたのであつた。

包と周は共に中共の「一大」に参加したことがあり、また同時に北伐軍と蔣中正の軍事委員会に在籍して事を行ったこともあつた。「日々疎遠」に属さない旧友は、周仏海の一九三七年の日記の中で最も頻繁なる登場率を誇つている。一月を例にとつてみると包の登場は一日、二日、六日、七日、一七日、二二日、二七日、三十一日の八回にわたつていて、周仏海はある時は「惠僧の家に行き夕食を

と」り、あるいは惠僧と「大華」へ行つて映画を見、またあるいは共に宴会に参加するなどその行動を共にしている。二月には九回に及び、その後周仏海が重慶を離れるまで二人は頻繁に對面しており、その友情は誠に尋常ならざるものであつた。

包惠僧は当時内政部参事を務めており、年まさに四三歳、しかしすでに政壇においては過去の人であつた。同じくも共産黨員であつた周仏海は江蘇省教育長・国民党中央党部民衆訓練部部长に任ぜられており、わずか三歳ちがいでありながら一九三二年の寧粵和談の際の南京側の「状元中委」（最多得票数）であつたし、また蔣中正の身邊に侍る身とあつて、その地位の差は大きかつた。周仏海は、自分は権貴の門に走ることが好まない、と語つていたが、包家へ頻繁に向かうというこの一点だけからしても、それは証明されたといえるだろう。

包家は周仏海にとつて、心中を吐露し憂いを払う場所であつた。雑談の中で周仏海はしばしば「感慨深く、我を忘れる」（三月三〇日）という状態となつたが、包は良き聞き手であり、周仏海が自身の変転浮沈を語る時、彼の感概によく耳を傾けるのであつた（二月二日）。包の前で周仏海は「激情にかられて常態を失する」（四月三日）ことがよくあつたが、一人になると結局いつも後悔するとはいえ、「狂うが如く怒り、激しく人を責める」（四月四日）

状態はたびたび発生し、それでもなお包氏は忍耐強くその友情を保ったのであった。まさにかくのごとく、周仏海と包惠僧は誰憚ることのない長年の友人同士だと見なされていた。幾許かの非常に敏感な活動についても、周仏海は包惠僧を避けなかった。一九三七年八月二十九日、周仏海は陳独秀が出獄して南京にいるのを聞いて包と一緒に会いに行く約束をし、「感慨ひとしおで、二時間ほど語つてのち辞」したのであった。

しかし包惠僧は周仏海をしてその欠点を改めさせ、方向を指し示す手助けのできるような友人では決してなかった。周仏海の日記の中には包氏の政治的見解に関する記録はほとんどなく、さらに滑稽なことに包惠僧はかなりのレベルで、事もあるうに周仏海の不倫の援護者に成り下がっていたのである。当時、周仏海は民衆訓練部職員陳曼秋（周仏海の日記中では「友」と称されている）と愛人関係にあった（詳しくは後述）。周仏海は大胆にも「淑慧（周仏海の妻周淑慧）引用者。以下同）」とともに友の家に赴いたことがあったのだが、つまりそれは「惠僧などと」同席していたからである（一月七日）。包は周仏海を援護しただけではなく、さらに間にたつての連絡役までしていたようである。「惠僧の所へ行き、死の知らせを聞いて心が碎けんばかりである」（四月一三日）。周仏海の日記によれば、陳曼秋との逢瀬では往々にして包惠僧の家で時を過ご

している。五月を例にとつても「六時半外出して夕飯及び友を訪れる。惠僧の家に至る」（五月一二日）、「五時に友と約束し、映画を見て夕食をとる。連れだつて惠僧家へ赴く」（五月一三日）とあるのは偶然ではない。

周仏海の日記から見る限り、周仏海と包惠僧の厚い友情は十数年間いささかも変わることがなかったが、このようにただ周仏海に付き従い、「差し向かいでため息をつく」（一月二五日）だけの友人は、周仏海が人生の進路をしつかり捉えるための手助けをする術を全く持ちはしないのである。

## 二 交 遊

家人を除き、周仏海の交遊範囲は大体五つのグループに分けられる。最初のグループは国民党の上層重要官員、いわゆる「党国要人」で、一九三七年一月の日記をもとにすると、周仏海は、時期は前後するものの以下の人々と交流を持っていった。

邵力子 陝西省主席、中央監察委員

段錫朋 教育部次長、候補中央執行委員

葉楚傖 立法院副院長、中央党部秘書長

谷正倫 南京憲兵指令兼南京上海警備司令、中央執行

委員

曹浩森 軍政部政務次長

熊式輝 江西省政府主席、中央執行委員

顧祝同 軍事委員會委員長、西安行營主任、重慶行營主任、貴州省主席、中央執行委員

蔣鼎文 西北剿匪前敵總司令、中央執行委員

余井塘 中央執行委員、江蘇省民政庁長

周啓剛 中央黨部海外黨務委員會主委、中央執行委員

汪精衛 中央政治會議主席

何應欽 軍政部長、中央執行委員

鄒魯 中央執行委員會常務委員

褚民誼 中央監察委員

彭學沛 中央執行委員、交通部政務次長

潘公展 中央執行委員

陳公博 中央執行委員

羅卓英 中將、一八軍軍長

吳鐵城 中央執行委員、僑務委員會委員長

陳果夫 江蘇省政府主席、中央執行委員

周仏海と南京のインテリたちが一緒になつて論じたものは、いづれも小事ではなかつた。ここに数例をあげると、

一月七日、周仏海は何應欽の家に行き、西安事變および「北京の反動教授の処理法」について話し、二月一八日には陳立夫・張道藩らと、連ソ・容共・國民大会・黨務の諸問題について談じた。四月二日は中央政治委員会に参加し

て土地法について討論している。六月三〇日には顧墨三のところに向かい、赤軍の收編および共產黨問題について話し合った。八月三〇日には汪精衛のもとで、戦争は頃合いを見て適當なところでやめるしかなく、外交交渉の準備をするべきであると述べ、またその「段取りと責任者の人選」と「汪先生は蔣先生を極力説得すること」を具申した。一〇月二〇日は国防參議會と國家總動員設計委員會に出席している。一月一二日、周仏海は三民主義青年團宣言を起草し、その後、復興社幹部劉健群・谷正鼎と会い三民主義青年團政治綱領について語っている。とはいへ、蔣中正に対する場合を除き、周仏海は人の話を聞く心理状態では決してなかつたのである。

政治上の中核に身を置きながら、周仏海は官界においてすこぶる洒脱であつた。盧溝橋事變の後、國民政府は中樞機構を調整し、八月八日には陳布雷が、蔣中正自らの意向として周仏海を侍從室第二処副主任とした。すなわちこの、人も羨む要職について周仏海はあるうことか、身の毛もよだつ「有様で、就任を引き延ばした挙げ句、九月一六日になつてようやく任に着いたのであつた。蔣は大本營を組織して、周仏海を第二部（政略）副部長につけたが、彼は繰り返してこれを辞した。後に國民黨中央は周仏海を代理宣伝部長にすると決定したが、周仏海といへば「焦燥せざるを得ず、一晚中安眠できなかつた」。当時の官界では任

命されると再三これを辞し、いかにも誠実さを装うところであるが、周仏海のかくの如き実直さが、みな甘さであると見ることはできない。このような場合だけではなく、周仏海は密かに人を評するの気概盛んであり、またその政治上の極度の自信が垣間見られる。たとえば宋子文の講話は、彼の目から見れば「幼稚な点が数々あり、このような妄論は国を誤らせること甚だしい」(一〇月二三日)となり、「国舅」を貶めることかくなごときである。南京で彼に比肩できるものがないようか。

第二のグループは周仏海が中央民衆訓練部・江蘇省政府・教育庁に在籍していたときの同僚あるいは部下で、教育庁主席秘書陳天鵬、教育庁職員楊天運、民衆訓練部主任秘書許孝炎、民衆訓練部民訓処処長吳紹澍らであった。第三のグループは包惠僧や江蘇省第十区行政督察專員梅思平、外交部亞洲司長高宗武、岳父楊卓茂、親戚嚴敦和などの親戚友人である。下級官職を担当している者もいれば、商売をしている者もいた。

周仏海は、これらの人々に対し指導者かつ庇護者の役割を演じた。周仏海は日記の中でこの種の役割について異なる用語を用いて区別をしている。梅思平は江寧「模範県」の県長を兼ねていたが、そこですこぶる堪えがたいことがあった。三月一〇日夜八時半、周仏海は鎮江から夜汽車に乗って南京へ至り、家にも帰らず「思平の家へ道を急ぎ」、

「なだめて」辞職をとどめさせた。新たに第二区(無錫)行政督察專員となった施奎齡が来たときは、「接見」(四月一二日)の語を用いている。また「(江蘇省政府庁の)阮・于兩名を呼び寄せて審査し、おたずね及び指示を与えた」(四月六日)という文章中では「召」「垂詢」「指示」を用いており、周仏海の相手に対する権力と地位および態度をよく表している。

政客の周囲に文人が出没するのはいかなる時代でも同じであるらしい。すなわち一九三七年一月と二月の日記によれば、周仏海と交流のある名の知れた知識分子に中央大学校長羅家倫、武漢大学教務長兼法律系主任周甦生、武漢大学副校長兼化学系主任王星拱、中央技芸專家学校校長周厚樞、武漢大学法学院院長皮宗石、南京『民国日報』総編集嚴慎予、復旦大学校長李登輝、香港華僑学院新文系主任樊仲雲、江蘇省立教育学院院長高陽、江蘇省教育庁編集易君左、北京大学教授陶希聖、中央大学教授薩孟武、燕京大学教授顧頡剛などがいる。これらの人々と周が話す内容は自然と学問のことになるのであるが、「政治・党务及び国際情勢」についても話題に上らないわけではなかった。学者をして政治に兼ねさしめる、というのはおそらく中国の讀書人が「学びて優れたるはすなわち仕る」となる正常な道筋なのであろう。周自身書生であったから、その文化圏に近づき、また文人との交流を行うことはごく自然であ

り、また得るところもある。たとえば易君左との会談後「文(民) 族文芸を提唱して、左派作家と対抗させるべきである」という考えが生まれたし(二月二五日)、また抗戦後「低調」を保ち、「適之(胡適)・希聖と外交の進め方について密かに相談し、今回の戦争から退場するための準備とした」(八月一六日)のであった。

彼の「友」、陳曼秋は周の生活の中で一種特別な役割を果たしている。彼女は未婚女子の身分を以て周と愛人関係にあった。周仏海の筆のもと、陳曼秋はもの悲しく恨めしい雰囲気につぼりと覆われている。一昨晩夢の中で友が「鬱鬱」という二文字を書いていた。何故か。まさか考えすぎか?(二月一〇日)。ご存じのとおり繁体字の「鬱鬱」はきわめて画数が多く、周仏海の夢はかくのごとく明晰であり、その情深さを感じるのである。一九三七年二月当時の周仏海は民衆訓練部部长を陳公博に任せた時期であつたが、当時の心配事とは部長の地位では決してなく、「ただ昵懇な友人への影響を思い、すすり泣くのを禁じ得ない」(二月二一日)というものであつた。

一九三七年の秘密の恋は奇妙であつた。周仏海は常に「友」のために心中穏やかならぬ有様であつたが、時に会えば、会わなくても良かったかのように諍いを起こすのであつた。「友の家に行き閑談する。頗る面白味なし」(一月一六日)。周仏海は鎮江・南京の両地を仕事で利用した

が、時間差を利用して「夜に友を訪ねた」。「友」と周仏海の交流は名分を得るものではなく、陳の疑似肺結核と思われる病状はどんどん悪化したため、陳曼秋はついには結婚にふみきつた。八月四日水曜日、周仏海は仕事に向かわず、午後密かに陳曼秋と会つて三時間ほど話をしている。

「共に悲涙に暮れるばかり」で、八月七日にも周仏海は陳と密かに会つてゐるが、「再会はほぼ絶望的」であり、「断腸の思いひとしお」であつた。八月一三日、陳は結婚し、周仏海はそのことをいつも気にかけていた。次の年、周仏海は武漢にあつて「淑慧に申し訳なく思」いつも飛行機に乗つて「友を訪ねた」。この期間、包惠僧は行つたり来たりして周仏海に情報を伝えていた。「惠僧からの手紙では、曼秋はまだこの世にゐるが、非常に痩せ細り、恐らく、そう長くはあるまいとのこと」等々である。

陳曼秋のような林黛玉式女子との付き合いは、当然周仏海に何の政治的収益も性格上の試練ももたらすこととはなく、ただ感傷的な気分を強めただけであつた。一九三八年一月、陳曼秋は世を去り、周仏海は「往時を振り返り、万感こもこも入り交じつて涙を禁じ得なかつた」。

周仏海は若いときから苦学し、生活はすこぶる苦しかった。重慶出奔後、汪精衛政権の中心人物となつてからは、日本の政府と軍部からの過酷な要求のもとで暮らしており、受けていた圧力は巨大であつた。一九二七年から三七

年まで、一〇年間の比較的ゆつたりした南京生活は、周仏海のような書生政客にとつて、実のところもつともふざわしいものであつた。それでも、往時の暗い出来事は、周仏海の心に終生滅することのない印象を残していた。一九四七年九月一三日、周仏海は終わりから二番目の日記を書いた。その中ではなお以下のように称している。「抗戦前を回想すると、余は京華に寓居していたとはいへ、権貴の門に奔走するを望まず、暇があれば旧友と徘徊していた。當時会わない日がなかつたのは惠僧や李次仙・楊天運……」。

これら周仏海の人間関係は、彼の主な「生活の場」であつた。ここから見えてくるのは政治という舞台の上の華やかさ、士大夫式感情の変遷および物質生活の裕福さである。前の二つは再度挙げるには及ばないが、裕福さについては、たとえば六月の夜間を例にとると、周仏海が客を招いたりまた呼ばれていったりしたのは一六回（友人宅での食事は含まない）、映画は七回見ている。

これらの生活において、周仏海はさまざまな役割や多面的な性格で対処しなくてはならなかつた。八月四日、陳曼秋と会つたあと帰宅した周仏海は、妻と深夜一二時まで語り合つている。次の日、周仏海は妻を「淑慧は一切を処理し、疲労困憊しているにもかかわらず、精神は相変わらずしつかりしているのは、まことに敬服の限りである」と賞賛している。多くの役柄を演じるのは実に苦勞であつた。

### 三 性格と判断

一九二六年に日本の京都帝国大学を卒業した周仏海のキャリアからすると、こうした生活はけっこうたいしたものではある。

しかし、周仏海はひとえに不愉快であつた。一九三七年から周仏海は「夕食後外出す。不快なることきわまりし。前途全く暗黒のごとく、一すじの光明も無い。一〇時に帰宅する。頭を覆い隠して臥す」（二月三日）。以下は周仏海が一九三七年三月一日から五月末までの日記に記した不愉快な記録について簡単に羅列したものである。

「昨晚は心乱れてよく眠れなかつた。とても苦しい！」（三月三日）。「慧澄がアモイに転勤と聞く。人生の出会いと別れは常ならず、あふれ出る感慨を禁じ得ない。……所在なく、九時に帰る」（三月九日）。「慧澄は月末にアモイに赴くとのこと。つきあつて四年、別れは近きにあり、別れを惜しみ、惜別の念を禁じ得ない」（三月一六日）。「雨激しく、くさくさして小さな部屋で座していても、気の紛らわしうがない。将来の様子を予想し、暗然とする」（三月一八日）。「連日の苦悶はすでに頂点に達していて、苦しみの持つて行きようがない。極力抑制しようとするもの、ついに抑えられず。……煩苦の極み、人生の意義、



失い尽きる気がする。何も欲せず人間を無為に過ごす。人類には苦難多く、であうところの矛盾は神仙が下界しても解決の術がない。ただ苦痛の日々である」(四月二日)。

「慧澄と手を降つて別れる。茫然自失の様」(四月四日)。

「もの悲しく無聊、心は彷徨っている」(四月二日)。「惠僧の所へ行き、死の知らせを聞いて心が碎けんばかりである」(四月一三日)。「序に至り、天鵬と過去一年の経過について語る。過去を悲しみ悼むの感に堪えない」(四月一六日)。「氣鬱・苦しみを紛らわす術がない。人生の悲歎離合を思うに尚更である」(四月一九日)。「夕食後南京へ赴き友を訪れる。我慢強くない性なので、不快であった」(五月二二日)。「悲しみの心で彷徨えば、もし失うところあつても、極力我慢すべきである」(五月三一日)。

これらを見るに、この不快な感情は悲しみを感じたときや親しい友との離別の際に多く引き起こされるもののようである。この種のきわめて感情的な感性は、冷血動物のような政治家が及びこる南京においてきわめて尋常ならざるものであり、周仏海自身があらためて総括した欠点でもあつた「一、軽率。二、大雑把。三、思慮が浅い。四、機転がきかない」(四月二〇日)という性格をもつて目まぐるしく変化する南京政治界に関わるのは、自ずから深淵に足を踏み入れるようなものであつた。

習慣が性格を養成し、性格が運命を決定する。周仏海が

この理を知らないはずはなかつたが、彼の自制力はきわめて薄弱であり、常に志を立てるといつてもそれは雄大さに欠けるのであつた。三月一日、彼は初めて志を立てた。

「定」の字と「静」の字より修養を積み、決して心任せに浮つかず、生活に空虚かつ不安を感じずに済むよう誓つた。しかしこの月のうち六日間は日記を記さず、また感情の動揺はきわめて激烈なものであつた(前文参照)。七月二八日、「二日に雑記一条というのは恐らく実行不能だろう」と記し、八月一日は日記を記していない。

周仏海の飲酒癖においては、容易に彼の性格上の欠点を見出すことができる。周仏海は大量飲みでしばしば量を超え、飲酒後は不適切な言論が多かつた。周自身も後になつて大いに後悔している。四月四日、楊淑慧は周の前妻の娘である周淑海を嫁がせたが、その日の昼、周仏海は中央民衆訓練部各科長の送別会に出席して、一酒量甚だ多し。淑慧の頼みを違え、心は極めて不安である。酒後、包惠僧の家で癩癩を起こし、「酒を飲み過ぎるからといって、人の地位や環境をあこれ詮索する事は許されない」。周仏海は日記の中で「後、切に戒めんことを宣する」と記している。しかし数か月後にはまた禁酒の戒めを一再ならず破っている。「夜に天鵬の処へ赴く。二人で少し飲み、留学時代について語りあう。覚えず量を過ぐす」(五月二一日)。「夜、卓を囲む。酒量甚だ多し。眠つた

後、ひどい頭痛を覚える」(六月六日)、「連日冷えたビールを飲む事が多く、胃病が再発」(七月四日)、「晩に君左の家に行ったところ食事となり、酒を沢山飲み……」(九月二四日)、「晩に蕭同茲の家に行き食事をし、酒を沢山飲み……」(二〇月二九日)といった具合である。一月二〇日、周仏海は「午後、伯粹と痛飲する」というやり方でもって南京に別れを告げた。医学的研究では、過度の飲酒は当事者の失望と不快感に対処する消極的方法の一つであるというが、周仏海の日記を通観すると、彼の飲酒癖がほとんどひどくなっていくことが見て取れ、健康に重大な損害を与え、また彼の興味や注意力の集中性に影響を与えているように思われる。

かくのごとき周仏海ではあったが、あいにく一九三七年という歴史の重大な時期に、彼は重要な職務に就いていた。七月七日、盧溝橋事件が発生したとき、周仏海は「食後昼寝をし、夕方五時によく起きる。晩は外出せず」とあり、その後七月一三日になってようやく「北方の情勢が緊迫しているとのことで、苛立たしいこと甚だし」とある。七月一七日、蒋介石は廬山第二次会議の会場で盧溝橋事件について、今では記録に残る談話を発表した。周仏海は実際に体験したものとして、所感を「発言する者が七名いたが、いずれも目新しいものはない」とだけ述べている。周仏海はその後映画を見、包惠僧の家に行つて話を

し、部下に接見し、陳布雷・熊式輝・陳誠・張曆生らと国事を語り、食事を続ける生活が続いている。周恩来・林伯渠との会見は本来得がたい機会であったはずなのであるが、周仏海は「老友」と称しつつもあらためて有益な教えを請うことはしなかった(七月一九日)。

七月三〇日、周仏海の日記中初めて、かつて上海暨南大学教務長を務め、立法委員であった楊公達と論じた「和戦の利害」の文字が現れてくる。まずは、当時中国の戦況は沸き立っており、汪精衛も『最後関頭』(七月二九日)を發表し、すべての民が最後まで抗戦する必要を打ち出していたという状況を知る必要がある。いまある資料から見ると、周仏海は当時南京政府の中で「和平」が中日戦争を解決すると最も早く唱えていた者の一人であり、これこそが周仏海をして後に「和平運動」に従事なさせ、ついには漢奸の名を中国の歴史に留めることになった思想の起点であるということができよう。このような重要な決断が日記中何の伏線もなく登場していることは、彼自身が後に語るように、これこそ情緒的な「軽率」であろう。

次の日の午前、周仏海は七時に起床し、陶希聖・楊公達を訪問した。三人の書生は「いずれも直ちに外交活動を開始すべし」との見解であった。当日昼は蒋介石が胡適・張伯苓・陶希聖を宴に招いていたので、周仏海は機に乗じて陶に託し進言させた。胡適の日記によれば彼はその日「外

交路線を断つべからず」と明確に表明しており、蔣に対し高宗武をこの任につけるよう推薦している。

高宗武のこの後の対日交渉過程については、すでに歴史に明記されている。実際蔣中正はこれ以外にも多くのルートで対日外交折衝を行っている。これらの秘密外交調停は、過去長年にわたり中国史学界で蔣の投降の準備としての妥協であると思なされてきた。現在の学界では蔣が国家利益の立場において交渉したと認識されており、彼の「両手での準備」(起りうる二つの状況に備える)の一つとされている。八月七日夜、蒋介石・汪精衛・何応欽・宋子文・孔祥熙・白崇禧・李宗仁・閻錫山・劉湘などにより組織された国防会議は、一方では積極的な抗戦を、また一方では外交部長に機を見て対日交渉を行うよう命じることを正式に決定した。二日目には邵力子がこの決定を周仏海に伝えた。周仏海はこのときから国民政府の最高方針に対してよく承知しており、胡適や陶希聖などに比して複雑な局面の中でも原則的な条件をよく把握していたということができよう。

しかし、周仏海の「大雑把」よく考えない」という欠点は、このころから彼の思考回路を主導していたらしい。彼は外交に責任を持たず、外交を研究もせず、そのくせ対日和平交渉は必然かつ唯一の選択と認めて自ら積極的に活動を推し進めていた。亡国の憂いはその心をすつぱりと包

み、性格上の欠点は余すところなくあらわれて、政治的判断力は次第に失われていった。

八月一日、周仏海の日記は初めて日本軍の空襲について記している。周仏海の家には堅牢な地下室があつたため、羅君強・郭心崧・梅思平・顧祝同・李師広・胡適・陶希聖・高宗武・程滄波・錢大鈞などがしょっちゅう避難に来ては語り合つていて、「低調倶楽部」の名は一世を風靡した。八月一日、周仏海は「三か月後には外交が始まるだろうと予測するが、望み通りに実現するかどうかは判らない」と記し、一七日には出しゃばつて高宗武と外交の進め方について計画を立てた。「人員を上海に派遣して川越〔日本駐華大使〕と接触する。或いは在野の著名人士を東京に向かわせるものとし、同時にロンドンに打電し、郭復初〔中国駐英大使郭泰祺〕に駐英日本大使と接触させるのもよからう」。一八日、周仏海は胡適を家に招いて、「彼に国防参議会で同志を集めてもらい、方案を制定し、外交を促進することにし」た。矢継ぎ早の行動は周仏海の切実な心情を物語っている。周仏海がかくのごとく積極的であったのは、彼が「国力不足を終始認識し、戦争は頃合いを見ても適当なところでやめるしかなく、外交交渉の準備をするべきだ」と考えていたためである。従つて八月二三日、高宗武を派遣して川越と会見させる話を蒋介石が望まぬと明確に表明したことは周仏海をいたく失望させ、おそらくは

和平交渉の時機を逸したとの認識を持った。彼はあきらめきれず、汪精衛を介して蔣に「力言」を託したが、蔣はそれを容れず、結局周仏海は陶希聖と「互いに無言のまま数十分ほどすご」したのであった（八月三一日）。

九月一日、蔣介石が外交調停を秘密裏に進めることにすでに同意したことを知り、周仏海は「いささか安心する」。

しかしこの後、蔣が抗戦を堅持してドイツ駐華大使トラウトマンが取り仕切る調停に対し、その原則に関わる譲歩を拒絶したことにより、周仏海はこの政治的庇護者に対し少しづつ不遜になってゆく。「蔣先生は今次の戦争について遠大な計画を持っているわけではなく、ただ犠牲を辞さぬ単純な決意だけで臨んでいるだけで、時局をいかに收拾すべきか、どの程度まで戦争を進行させるのかはいまだ考慮していないように見受けられ、苛立たしい」（九月十五日）。「またドイツ大使は、さきのヨーロッパ大戦の時、何度かけりをつけられる機会があったのだが皇帝ヴィルヘルムが応じなかったために、ついに一敗地に塗れることとなった、中国がこの轍を踏むことなきように、とも述べたというその言、まさに誠意ある忠告なり。しかるに蔣先生は考慮することを拒絶した。一体このまま突き進んでいつ何が期待できるというのか！」（十一月六日）。このような時期とはいえ、蔣が為した幾許かのことに對しては、いたく敬服している。たとえば中央通訊社発表の「国共合

作公表に関する中国共産党の宣言」について、周仏海等は国外の反響の大きさを懸念したのだが、結果はそれほどではなく、「確かに、蔣先生の見識は人より一段上であることには敬服する。我輩の杞憂であった」（九月二十七日）。周仏海自身も認めていたように、彼の蔣に対する感情は先生に對する小学生と同様であったが、先生が何故万難を排して抗戦を堅持しているかということについては、いくら頭を働かせても理解できなかった。

当時の南京には、蔣の抗戦強行論は検討に値すると考えるものが少なからずいた。胡適は外交手段を用いて解決することは miracle（奇跡）だと考えていたし、陳布雷は終日気が気でない有様であった。熊式輝は和平交渉を主張していたものの、今はその時期ではないと考えていた。これらの「緩和派」は決して周仏海の賛同するところとはならなかった（一〇月三日）。同時期、陶希聖・高宗武・梅思平ら「急和派」の論は周仏海の関心を得、すでに方針を変えつつあった汪精衛も日をおって意気投合し始めていた。国防参議會で日本と絶交すべしと提議した者があつたが、「汪先生の言うように、当方からの絶交では、我国は応戦から挑戦に変わってしまい、國際の同情が我々にあるという情勢も大きく変わってしまう。従つて断交を主張する者は、國家の外交政策を破壊する者であり、漢奸と呼んでもかまわない」という。周仏海は「この見解はまさに余の意

見と同じ」と記している（二〇月一三日）。実のところ、国民政府は盧溝橋事件のあと宣戦問題についてすでに討論しており、日本は中国側の宣戦を口実にあらゆる港を封鎖するのであるから、最終的にこちらからの宣戦はしないと決まっていた。断交を主張するのはこの点を考慮してはいないが、それにしても周仏海がこれを「漢奸」視するのははゆきすぎであろう。不思議なことに、周仏海の「漢奸」に対する苛烈さは、彼自身の現在の情勢と前途を悲観的に感じていた状況のもと生まれたもので、その論理はただこう解釈できるにすぎないのである。早期に和平交渉をすることこそが真の愛国である、と。

九月末、上海の戦争が徐々に不利になるに従って、周仏海の感傷は「時局に対し極めて悲観的であり、このため食事も不味く、早々に夕食を済ませた」（九月二十九日）という域にまで達する。悲観的な気分に入る周仏海は、いかなる情報に対しても、当時の大多数の人の解釈にも等しく不同意を示した。十一月三日、陳布雷は彼に「和解は絶望となり、軍事も壊滅状態のため、遷都を準備中」と告げられた。周仏海は「胸を掻きむしられる思い」で「ますます前途に悲観を覚える」。十五日、国民政府が重慶に遷都するとの報を聞いて後は「中枢の移動で政治が解体することにならぬかどうか、非常に心配である」としている。

周仏海の立場からすれば、この時期各界のさまざまな意

見を知りうる多くの機会があつたはずで、また焦慮をやわらげ、楽観的になることもできたであろうが、彼自身が総括したように、彼と親密な往来があるのは一貫して小さな範囲の数人だけであつた。「理を見るに明らかならず、事を看るに清らざるに到り、目の光炬のごとき見解なし」。蕭錚・葉潮中（侍従室秘書）が来て話をしている。周仏海と彼らは「このまま戦いを続ければ、中国のための戦いではなく、実際はソ連のための戦いになり、国民党のための戦いではなく、実際は共産党のための戦いになる」（二〇月六日）。包惠僧の家へは相変わらずよく訪れており、「互いに嘆息」（二〇月二六日）している。陳布雷と話す際もまた「互いに嘆息」のみである。嘆息がやまない周仏海は、南京を離れるにあたり陳果夫に江蘇省政府の本務および兼務職の辞任を連絡し、当時人々が義憤に駆られて西へ向かうような勇壮さも不屈さも全くなき、「江蘇の教育を六年も主宰し、これまでいつものような状況下で地位から外れるのか分らないと思つてきたが、今まさに国難迫り、流亡の事態の中で任務を明け渡す事になるなどとは予想もしなかつた。悲痛の極みである」と嘆じている（二一月一五日）。

政治上の陰鬱な気分と感情的な生活上の「名残惜しき心は底知れぬ」（二一月一九日）心情は共に入り交じり、周仏海の消沈した心持ちをなおさら沈めた。当時陳曼秋はす

でに南京を離れていたが、周仏海はしょっちゅうその別れの情景を思い浮かべて「往時を振り返ると悲嘆せざるを得ず」（九月七日）、嚴敦和が慢性盲腸炎を得たとき、いたく心配しつつも「旧友のことを思い出すと、茫然自失」（九月二六日）になってさえたのであった。恋人に対し切ない心持ちを抱くのと同時に、湖南で娘の婚礼を取り仕切っている楊淑慧に対してもまた心配は尽きず、電話が一度でも通じないと「室内を徘徊し、居ても立ってもいられぬ」（二〇月八日）有様であった。楊淑慧は十一月一七日にようやく南京に戻り、周仏海と「手を握りしめながら互いに慰め合」った。どうにもならない深い憂いのもと、周仏海は日記に「痛飲して憂いを解く」と記すことが大幅に増え、またその時間も夜間から昼間・夜へと連続するようになっていた。

#### 四 選 択

暗澹たる状況のもと、十一月一六日周仏海は突然日記の最初の行に「新しい生命の開始の日」と記した。周仏海の生活に何か喜ばしい変化でも起きたのであろうか。この日、周仏海は日記に三件の政治的事務について記している。一つ目は、早朝南京女子中学校の校長劉蘅静がやってきたことである。というのも周仏海が内陸部への移転をす

ることになっていたため、劉の「恐らく庁長にお目にかかることは、もうできないでしょう」という一言を聞いたとたん、周仏海は「亡国の兆しなり！」と解する。二つ目は、蔣が和平交渉を行わないことに対しての不満についてである（前文参照）。これらの論理からして、「新しい生命の開始」とは、三つ目の政治的事務である、周仏海と高宗武が「今後の政治の活路について詳しく協議」したことなのであろう。

では「今後の政治の活路」とは何か。周仏海ははつきりとした説明はしていない。次の日、彼は「日頃、悲嘆の極みに至る。中国にはもはや今後歴史はないのだから、もはや日記を書く必要なし」と不承不承に記し、十一月八日夜また酒を飲んで深夜一二時になって帰宅した。時に「強風吹きすさび、鬼神号泣するがごとし」であった。周仏海は悲しみのままこう書き記している。「昔、李自成が北京を寇掠した時、夜、孝陵で泣く者があったという。この強風もまた亡国の兆しなのか。悲痛の至りなり！」一九日、周仏海とその妻は旅装を整え、引越しの準備をした。「あたかも八か国連合軍の北京入城で朝廷中の文官武官がほうほうの態で逃げ去った惨状の如く、悲しき風音、濃い霧は凄惨さをかきたてる」。二一日、周仏海は長江の船上で同行の国民党幹部ら「災難を背負った役人達はどこに死に場を得られることであろうか」と悲しみ嘆いた。一二月一一

日、周仏海は武漢で国防参議会に参加し、そこでドイツの調停がついに失敗したことを聞いて「命運もはや尽く。挽回の余地なし！ 我らの死に場所はどこになるやら」と長い溜息をついた。以上から、周仏海の言う「今後の政治の活路」とは、亡国がすでに動かぬものとなったという判断をした上でのことであると見なし得る。速断と悲観、周仏海の内にはかくのごとき奇妙な結びつきがあり、それが彼の政治的運命を決定していくのである。

唐徳鋼教授は後に周仏海らについて論及し、「これらの人士はみないずれも都市のプチブル出身の知識分子に過ぎず、ああでもないこうでもない懸念する青白き中年書生である。きわめて計算高く、英語の *calculus* である。大衆が眠りこけていても自分は覚醒しており、熟慮を重ねていると思っているが、一種単純な共同言語を使って、一人が歌えば他もそれに和す如く、これを是とする。……李宗仁・馮玉祥などという人物こそが当時の絶対多数の絶対多数である。当時この抗戦の激しい熱気の中、一体どれだけの秀才が役に立ったというのか？ 彼らは知らないかもしれないが、これは秀才の悲哀なのである。国事に對し何かの足しになったとでもいうのだろうか？」周仏海は後に南京の獄中で常に自身の毀誉褒貶とその足跡を思った。しかしながら、かくのごとき歴史は、肺腑をえぐるものであつたに違いない。

我々に導き出される周仏海のその後の人生の路！——中国史上亡国の臣には三種ある。まずは遺老となるもので、山林溪谷、あるいはありふれた路地に住み生涯を終えるのであるが、これは決して「政治の活路」ではない。周仏海はすでに政治の活路について語っているので、ここには当てはまるまい。二つ目は節に殉ずることで、周仏海は九月二二日日本軍の爆撃に遭つたとき、すぐに「このまま長引けば、運良く生命は保たれたとしても、家は災難から免れないであろう」と考え、南京の寓居に別れを告げたときも「室内を徘徊し、離れるに忍びなき思い」（一一月二〇日）をしている。明末、清に帰順した洪承疇が衣服の埃を払うの類で、節に殉じるといふ選択は当然無しである。三つ目はいわゆる良禽木を択びて栖とす、君子は危墻の下に立たずで、錢謙益・龔鼎孳・梁鴻志・王克敏等という人物のつた選択である。

南京・武漢・重慶、周仏海は転々とめぐり、そのどこもが危墻の下にあると感じていた。一九三八年一月五日、周仏海は重慶から飛び立ち、昆明へ向かった。「国家の存亡、個人の成敗、すべてこの行動にかかると！」これこそが周自身の考えた「今後の政治の活路」である。とくに、この人生の重要な時、周仏海は深い悲しみをもって亡き友陳曼秋を思い、また反省を語る。現状に不満を抱き、過去に未練を示すのは、精神の至らぬ故であろうかと。これら

は、医学における大酒飲みの性格研究の結論と比較的近似している。

一九四〇年二月二〇日、周仏海が南京を離れてから三年の月日がたつていた。このときの彼は、汪精衛政権のもと行政院副院長兼財務部長・中央儲備銀行総裁を務め、また特工総部・警政部を掌握してその実権は陳公博を超え、位人臣を極めていた。その日の夜は、東条英機と夕食を共にした。「客もほとんどいなかったので」酒を飲んでいなかった周仏海は「冷静に考える暇ができ」、「武漢、重慶にいたときの日本に対する観察が非常に誤っていたものであり、それが今事実となって表れており、いづれも抗戦派の理論の正しかったことを十分に証明している事を深く感じる」のであった。

この前の一九四〇年三月三〇日、汪精衛国民政府は「選都」した。周仏海はなおも「本日は余の生涯にとって一番に痛快な日である」と公言する。そして「和乎運動」はその主導とするところ、実にすなわち「人生にとって最も得意とするところ」と語る。九か月に至らずして、彼はまたもや「軽率」であったのである。

## 結 論

周仏海の性格は、彼が汪精衛陣営に身を投じ、主要な地

位を占めることを決定づけた。それはまた、汪政権の流転と運命そしてその存在そのものに影響を与え、また抗戦時期の中国の政治環境にも影響を与えている。これらのことから考えれば、周仏海個人の性格が民国史に対しある種の影響を与えたのである。

## 注

- 〔1〕 周之友「關於周佛海日記」周仏海著、蔡德金編注『周佛海日記全編』中国文聯出版社、二〇〇三年、一頁参照。本文内に引用した日記は、別に注をつけたもの以外はすべて当該書上編一九三七年部分によるものである。括弧内に日付を記した。
- 〔2〕 一九八六年七月、中国社会科学出版社は蔡德金氏編注『周佛海日記』上下冊を出版した。しかし現在発見されている周仏海の日記がすべて収録されているわけではない。本論文は二〇〇三年の最後の版本を使用した。
- 〔3〕 包惠僧「共産党第一次全国代表大会前後的回憶」包惠僧『包惠僧回憶錄』人民出版社、一九八三年。
- 〔4〕 一九三八年四月八日の日記。『周佛海日記全編』上編、一一〇頁。
- 〔5〕 一九三八年四月九日の日記。『周佛海日記全編』上編、一一〇頁。
- 〔6〕 一九三八年七月一〇日の日記。『周佛海日記全編』上



- 編、一四三頁。
- 〈7〉一九三八年一月一〇日の日記。『周佛海日記全編』上編、一九四頁。
- 〈8〉一九三八年九月一三日の日記。『周佛海日記全編』下編、一六六頁。
- 〈9〉 Jones B. Chin, *Tung Ganey*, 2001, 3 (1): 37-41.
- 〈10〉一九三一年—一九三七年の日記。胡適『胡適全集』第三卷、安徽教育出版社、二〇〇三年、六六八頁。
- 〈11〉「盧溝橋事件第七次会報」(一九三七年七月一七日午後九時) 中国第二歴史檔案館編『中華民国檔案資料滙編』第五集第二編 軍事(二)、江蘇古籍出版社、一九九八年、二〇—二二頁。
- 〈12〉「唐德剛序」陶恒生『高陶事件』始末』湖北人民出版社、二〇〇三年、一七一—一八頁。
- 〈13〉一九三八年二月五日の日記。『周佛海日記全編』上編、二〇五頁。
- 〈14〉一九四〇年二月二〇日の日記。『周佛海日記全編』上編、三九六頁。
- 〈15〉一九四〇年三月三〇日の日記。『周佛海日記全編』上編、二七二頁。

※周仏海日記本文の訳出にあたっては、蔡徳金編、村田忠禧他訳『周仏海日記』みず書房、一九九二年を参照した。